



日本で研修を受けたエルサルバドルの研修員に対し、さらに現地で耐震工学の補完研修を行った(横井さん:前列中央)

「最近では、明確な意志と使命感を持って国際協力に参加する若い人が多いようですが、私が青年海外協力隊に参加したころは、むしろそうではない人の方が多かったような気がします」。国立研究開発法人建築研究所国際地震工学センターのセンター長を務める横井俊明さんは、1986年に青年海外協力隊に参加した当時のことをこう振り返る。

「あの頃の私は、日常に対して漠然と閉塞感を抱いていました」と話す横井さんは、大学院時代に専攻していた「地球物理学」が青年海外協力隊の募集職種にあることを知り、当時務めていた民間企業を休職してコロンビアへ飛んだ。派遣先は、コロンビアのカリ市にある「カウカ河自治開発公社」。

同社がスイスの技術支援の下で進めていた地震観測所の設立に、日本人として携わるという特殊な立場での参加だった。関連機関の間の調整が取れておらず戸惑うことも多かったが、持ち前の楽観的な姿勢と専門技術を生かしながら協力した。3年間の任期を終え帰国した横井さんは、大学や研究所などの勤務を経て、現在は、応用地震学の専門家として建築研究所に勤務している。同研究所は、地震学や耐震工学に関するODA事業も手掛ける組織で、横井さんは開発途上国の対応部署である国際地震工学センターのセンター長として、国際地震工学研修事業の企画運営などの指揮を執りながら、海外研修員向けの講義などを担当している。同研修は、1960年から始まった歴史ある事業で、帰国研修員は、今や100カ国、延べ1680人を数えるまでに増えた。横井さんやその先輩の教え子は、現在、世界中で地震観測や耐震設計・震災対策などに関する専門職として活躍しているという。

「グローバルという言葉は、日本の外」という意味合いで捉えられがちですが、私は「自国・自文化の外」と捉えています。そう話す横井さんにとって、自国を離



研究
で
活躍

日本と世界の 地震防災を支える



れて日本に地震防災を学びにやってくる研修員の指導は、「グローバル人材の育成」そのものだ。横井さん自身も、国内に拠点を置いて活動する傍ら、JICAの短期派遣や国際連合教育科学文化機関(UNESCO)との連携プログラムなどを通して、中南米やアジアを主とする世界各国を訪れ、調査や研修に協力している。

「海外の人々と接する上で大切なのは、文化的背景が異なる相手との向き合い方です。国・地域ごとに異なる文化や習慣、好みなどを、発展や近代化の度合いの差だと思いきや、いまいち気をつけることが大事です」と横井さんは指摘する。それは、地域性の強い応用地震学を専門とし、各国から研修員を受け入れながら、自らも多くの国に足を運んでいるからこそ分かる、国際協力の心構えだ。

国際地震工学センターで、開発途上国向けの国際地震工学研修事業を担当する今の自分は、まさに青年海外協力隊の延長線上にあります。私が専門とする応用地震学では、強い揺れの発生原理とその観測技術、影響の予測を、土木工事的な現場での作業から数値シミュレーションまでさまざまな手法を使って研究します。また、地域性が強い課題を扱うので、“think globally, act locally”の実践が大事になる点が魅力です。私たちは、応用地震学分野での研究と耐震設計、津波防災分野を束ねた研修事業によって、日本と同じリスクを抱える開発途上国の地震・津波防災対策に協力しています。

国立研究開発法人建築研究所
国際地震工学センター センター長

横井 俊明さん YOKOI Toshiaki

PROFILE

京都府生まれ。大学院で地球物理学を専攻し、民間企業勤務を経て1986年から青年海外協力隊(コロンビア共和国:地球物理学)に参加。現在は、(研)建築研究所国際地震工学センターのセンター長を務める。